校長室便り
♪ シンフォニー ♪
響きあうこころ

令和６年（2024 年）４月５日（金）
第 21 号
校　長　　布川　勝也

大昔から、「国語は基幹教科」と言われていますが、国語教師・布川は 1983 年に教員になって以来、ずっとその言葉がこそばゆく、気恥ずかしく、基幹教科としての責任を果たさなければならないと思ってきました。

思考力・判断力・表現力の根幹は言語能力です。本校が県教育委員会から指定され推進している理数教育は、文理両道で科学的・論理的思考能力を育成しますが、その能力の根幹は言語能力です。言語活動、言語能力の育成は全ての教科で行うことになっていますが、その言語活動、言語能力の育成をストレートに扱うのが国語科です。ですから、国語は基幹教科ということになるわけです。

国語力（言語能力）伸長・生田メソッド

国語入門書と称した『一度読んだら絶対に忘れない国語の教科書』という参考書？があります。著者は西大和学園中学校・高等学校の教諭である辻孝宗さん。冒頭、「国語（現代文、古文、漢文）を学ぶ目的」を「現代の文章が読解できるようになること」と断じ、「古文も漢文も、学習の目的は、あくまでも現代の文章が読解できるようになること」とあり、「そうだ。そうだ。」と思うと同時に生田メソッドとの関連がイメージされ、読むことにしました。読むとすぐに、「古文と漢文を現代文の読解という目的で勉強することによって、国語力が相乗的に伸びる」とあります。この「相乗」というのが文武両道・文理両道をはじめとした生田メソッドのキーワードなわけです。

続けて、「読解」→「語彙」→「文法」の順に学べと。そうすることで、マクロ（文章の全体像）からミクロ（１文１文の意味を正しく理解する）という流れで文章を理解することができると。【（布川）演繹ではなく帰納。「知識習得→活用」ではなく「情報活用→知識習得」。そうやって自然に身に付けた知識を演繹（活用）します。】

「読解」と「読む」は違う。「読む」とは「読み取り」であり、「読解」とは「『一番言いたいこと』の『解釈』」であると。【「読み取り」という単語に込めた意味が私とは違います。それは後ほど。】

文章を読むときは、必ず「事実の整理」から始める。「事実の整理」は国語だけでなく人生全般に役立つスキル。【そのとおり。「事実の整理」は私の生徒指導の根本であり、仕事術の基本です。】

文章には「７つの型」があると続きます。①同格型（Ａ→説明→Ａ）、②質問型（Ｑ→本文→Ａ）、③対比型（ＡvsＢvs…→本文→ＡvsＢvs…のいずれか一つ）、④変化型（変化前→変化理由→変化後）、⑤ギャップ型（変化型の派生型）（変化後の隔たり（ギャップ）を強調）、⑥葛藤型（対比型の派生型）（ＡvsＢで思い悩み、葛藤が読み手への質問となり、結論がない場合が多い。）、⑦説話型（エピソードを通じて教訓を与えるが、教訓の内容の解釈は読者に委ねられる。）この７つです。

著者は、読解を読み取りと解釈に分けていますが、【】にも書きましたが、私の言葉づかいでは、①～⑥は著者が「解釈」と呼んでいる部分も含めて「読み取り」です。私の言葉づかいでは、「自由度のない読み」は「読み取り」です。唯一解のあるものは「読み取り」です。ですから、私にとって、解釈と呼べるものは⑦のみということになります。（⑥で結論が出なければ、結論がないことが明確となり、解釈の余地はなく、やはり「読み取り」です。）（第９号『国語教師布川とＡＬの視点』参照）

≪基本的にすべての意見は「否定」である≫。これは痛快です。意見とは現状にＮＯを突き付ける行為だと。肯定派は意見を言う必要がないわけです。だから、「逆接」に続く主張が重要になるわけです。

ここまで書いて、もうちょっと書ききれないなと諦め、まとめてしまいますが、とにかく古文・漢文がいかに現代語の語彙力・文法力を支えているかということが書かれています。私が「読み取り」と呼んでいる「文法による現代文解釈」、文法の力は絶大です。順番は、「読解」→「語彙」→「文法」です。

さて、本の内容紹介を大胆に縮め、捻出した余白で、「古文・漢文の力で読む現代文」ならぬ「現代文の力で読む古文・漢文」という持論を紹介します。古文単語の参考書の単語数は何語でしょうか。本によってまちまちですが、少ない方ではマドンナ古文単語の 230 語、多いものでも 600 語です。英文を和訳しないのはそれが自然だからであり、古文も現代語訳しないのが自然であり、600 語あっても現代語訳はできません。ですから、限られた古文単語数を駆使して、後は文法力、現代文の力で読むことになります。限られた古文単語数で古文を読むのは、それが受験テクニックだからではありません。それが自然な読み方だからです。

ですから、初見の文章を読むとき、多くの場合は問題演習で読むのでしょうが、解き終え、自己採点し、復習するときに全訳を見てはいけません。全訳がわからずとも、何がわかれば読めたのか（正解できたのか）を確認します。根拠は、文法と 600 字以内の単語数にあります。そうして合点が行って、初めて全訳を見ます。全訳を見ると文章の意味が深くわかります。ですから、解き終えて、すぐに全訳を見てしまうと（深くわかってしまうと）、全訳の内容がわかるだけで古文が読めるようにはならないということです。

いずれにしても、言語能力は資質・能力の中心です。ですから、国語が基幹教科なわけです。皆さん、「読んで、考えて、書いて」言語能力を鍛えましょう。**「国語力（言語能力）伸長・生田メソッド」です。**